Osaka University Knowledge Archive

Title	クラーソン研究方法 : 先行研究の概観と今後の展望について
Author(s)	竹本, 統夫
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2007, 17, p. 289-300
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/96444
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

クラーソン研究方法(*)

ー先行研究の概観と今後の展望についてー

竹本 統夫

1. 作家スティーグ・クラーソンとその研究の意義

スティーグ・クラーソン (Stig Claesson, 1928 –) というスウェーデン人作家は，日本においては殆ど知られていないといっていいだろう．彼は 1956 年にデビューした大衆作家である．ヴェステルイェートランド地方出身の両親のもとで，ストックホルムのセーデルマルム地区に生まれた彼は，都会と農村という二つの世界を往復しながら成長する．幼少期から，後にストックホルム近代史の語り部と高く評価されたパール・アンデシュ・フォーゲルストレム (Per Anders Fogelström, 1917 – 1998) との友情に結ばれた彼は，フォーゲルストレムに次ぐストックホルムの語り部として評価されたばかりでなく，19 世紀より増加し続けていた農村から都市への移住者たちの代弁者としての役割をも担うに至った．都市と農村との間に横たわる明暗を描くことで，経済的に成長するスウェーデンとそこに生きる人々が直面する現実を訴えようという彼の試みは，1963 年の『農夫たち』(*Bönder*) から発し，1968 年の『誰がユングヴェ・フレイを愛すのか』(*Vem älskar Yngve Frej*) で結実する．この作品の発表で成功を収めたクラーソンは，やがて社会派の作家として認知され，その後も変化を続ける世の中の流れに消えゆく人々の代弁者として精力的な執筆活動を続けている．

こうした彼の活動の根底にあるものは，もちろん都市と農村の往復という経験だけではない．フォーゲルストレム率いる「ヴィータバリ倶楽部」(Vitabergsklubben) という地元の少年たちの集まりに参加し，文学活動，芸術活動，そして時事問題に関する様々な議論にいそしんだ彼は，王立芸術アカデミーに入学（1947 年）してから共産主義者たちと接点を持つようになり，彼らとの交流をきっかけにユーゴスラヴィアでのボランティアに参加することになる．合理化を繰り返し経済的な発展を続けてゆくスウェーデンと，その発展によって消えてゆくことを余儀なくされる人々を描くという彼の執筆活動の背景には，こうした若き日の共産主義との接触も見え隠れする．

クラーソンは文学史の本には必ずといって良いほど登場し，代表作『誰がユングヴェ・フレイを愛すのか』が今日において国内向けの文学教材としても使用されるなど，作家として十分に注目を受けているといえる．その一方で，クラーソン

の執筆活動や作品を題材に小論文を書く研究者はわずかにいるものの，スウェーデン国内で積極的な研究がなされていないのが現状である．それ故，今やスウェーデンの国民的な人気作家となったクラーソンの執筆活動の根底にあるものを明らかにすることは，スウェーデン文学研究史の発展においても大きな意味を持っているといえる．

本稿では，私がこれまでに実見したクラーソンに関する文献のなかから，クラーソンに関わる研究に用いられる頻度が高いもの，および研究者がクラーソンを知る上で一度は目を通すべき文献であると筆者が判断したものを紹介する．それと同時に，まだ途上といえるクラーソンを対象とした研究活動の現状を概観することによって，現代スウェーデン文学研究の場においてクラーソンという作家のどこが注目されており，今後どのような課題があるかについて展望する．

2. 資料と先行研究概観

クラーソンの作品は他国で紹介される機会にそれほど恵まれず，またそれらが学術的な研究対象として取り上げられることも決して多くない．それゆえに，先行研究といえるものは極めて少ない．したがって，クラーソンという作家をめぐる研究手法も確立されているとは言い難い．

その一方，作家としては比較的注目されており，スウェーデン文学史のなかでその名前が挙げられることも少なくないことは１章で述べたとおりである．実際に，これまで国内の雑誌や新聞に掲載されたインタビューや書評は枚挙にいとまが無い．

それでは，こうした資料の数々は，実際にクラーソン研究に生かすことはできるのだろうか．本章では，クラーソンを取り上げている文献のいくつかを紹介する．

2.1. クラーソンに関する主な文献

クラーソンに関する文献のうち，目録化されたものは Libris (http://www.libris.kb.se) を使って検索することができる．これは，スウェーデン全国の図書館の目録を電子化したもので，それらを横断検索する機能を提供している．目録化されていない文献に関しては，Libris で見つけたものに挙げられている参考文献を参照するか，スウェーデン全国の公立図書館で利用できる雑誌記事検索に頼ることになる．また，殆どの雑誌，新聞に掲載されてきた書評，インタビュー，その他クラーソンに関係のある記事は Bonniers 社のアーカイブに所蔵されている．

以下では，筆者が実際に調べることができた文献を挙げて検討してゆく．

2. 1. 1. 学術論文

Bergman, Mats. 1980. *Det samlande projektet i fem romaner av Stig Claesson. En studie i den "avsomnade" förståelsen.* (CD uppsats / Lunds universitet). Lund: Litteraturvetenskapliga institutionen.

Ernby, Birgitta. 2001. "Dået och nuet: en studie i Stig Claessons roman Vem älskar Yngve Frej", i Allén, Sture (red.). *Gäller stam, suffix och ord : festskrift till Martin Gellerstam den 15 oktober 2001*. Göteborg: Göteborgs universitet.

Härlén, Annika. 1991. *Vem älskar Yngve Frej; en jämförelse mellan Stig Claessons roman & Lars Lennart Forsbergs film.* (CD uppsats / Lunds universitet). Lund: Litteraturvetenskapliga institutionen.

Malm, Eva. 1975. *Förteckning över ett urval gestalter i Stig Claessons romaner.* Specialarbete vid Bibliotekshögskolan. Borås: Bibliotekshögskolan.

Theil, Claes 1981. *Stig Claesson - som författare*. Specialarbete / Bibliotekshögskolan. Borås: Bibliotekshögskolan.

クラーソンに関する文献のなかで，本格的な学術論文は多くはない．具体的に見ると，Theil (1981) は，論文というよりもクラーソンの執筆活動の概要という側面が強いが，その一方でクラーソンの経歴に詳しく，また参考文献には有用な資料が何点か挙げられている．Ernby (2001) は，1968 年出版の作品『誰がユングヴェ・フレイを愛すのか』を研究の対象として，小説で使われている様々な語彙に着目し，これらが作品中の「今」と「昔」を象徴していることを言語学的観点から実証しようと試みている．さらに，この小説の舞台 Bråten のモデルとされている Gällstad 出身の女性の証言を補足的に用いている．[1]

一方，Libris で目録化されていないものの，スウェーデン国内の各大学内のアーカイブに所蔵されている学術論文も存在する．これらには博士論文や学会誌への投稿は含まれておらず，日本で言う学士論文あるいは修士論文に相当するものである．

Malm (1975) は，研究ノートといった色合いの濃いものといえる．これは，およそ 1975 年までに出版されたクラーソンの作品数点に登場する人物たちの一覧と簡単な解説で，各人物について作品中の人間関係などを中心に簡潔に掲載している．

その他２点は，いずれもルンド大学の単位取得論文である．Härlén (1991) は，文学作品としてではなく映画の研究が主で，Lars-Lennart Forsberg によって映画化（1972 年）された『誰がユングヴェ・フレイを愛すのか』と原作の小説とを比較したものである．一方 Bergman (1980) は，クラーソンの複数の小説に見られる共通のテーマや類似した描写などを比較，考察し，明確な作家像を導き出そうと試

みたもので，作者とのインタビューも行っているという本格的な論文となっている．

2. 1. 2. 作者との対談

Enander, Crister. 1993. “Skygge Slas i unik intervju: jag vill lära mig leva utan hopp!”, *Tidningen Boken,* 14 – 18. Malmö: Tidningsproduktion.

——. 1995a. “Vad fan vill du mig?”, text: Crister Enander; foto: Leif Claesson, *Folket i bild/kulturfront*, 24 - 30. Stockholm: Folket i bild / kulturfront.

——. 1995b. “Stig Claesson”. Enander, Crister, *Relief*, 221 – 241. Stock- holm: Legus.

Lidbeck, Gunilla. 1998. “Stig Claesson, ‘Slas’: ‘Man är ju uppväxt med skomakarflit.’”, *Femina* Nr. 2, 91-94. Helsingborg: Aller Specialtidningar.

Schueler, Kaj. 1989. “Två gentlemän har ordet”, *Svenska Dagbladet.* Stockholm: Svenska Dagbladet.

対談は，客観性には欠けるものの，クラーソンの経歴や思想を知る上で有用な資料である．例えばEnander (1993)では，クラーソンの政治的な見解に踏み込み，彼がスウェーデンそして世界に対してどのように向き合っているかが語られている．

Lidbeck (1998)では，クラーソンの所有するヴェステルイェートランドの家でインタビューが行われており，そこでクラーソンは彼の親戚について詳しく語っている．また，インタビュアーによる記述の中には，クラーソンが数年後に出版する作品に登場する描写と極めて類似した箇所が認められる．このように，インタビュー記事が作品を読む上で重要なヒントを与えてくれることは少なくない．さらに作者自身の具体的な経歴についても，インタビューでの会話の中からある程度知ることもでき，活字化された資料の中では突出した情報量を誇っている．

また，1989年の日刊紙*Svenska Dagbladet*でのSchuelerによる記事は，フォーゲルストレムとクラーソンとの対談記事である．ここでは二人の出会いからヴィータバリ倶楽部の活動，そして若き日のストックホルムでの生活などが両者の口から語られており，デビュー前のクラーソンの動向について豊富な情報が提供されている．

2. 1. 3. クラーソンの文学史項目

はじめに述べたとおり，スウェーデンで出版された文学史を扱った書籍の中で，クラーソンは比較的よく紹介されている．

Ekman, Arne m fl. 2000. *Nationalencyklopedin Multimedia 2000 på CD-ROM för PC och Macintosh.* Höganäs: Bokförlaget Bra Böcker.

Hammarbäck-Lundin, Tia & Wahlberg, Kerstin.1986. *Författare i vår tid,* 57 - 59. Stockholm: Natur och Kultur.

Hägg, Göran. 1996. Den svenska litteraturhistorien, 585 - 586. Stockholm: Wahlström & Widstrand.

Lönnroth, Lars & Göransson, Sverker. 1990. *Den svenska litteraturen,* ss.34 - 35. Band VI. Stockholm: Bonnier Fakta Bokförlag.

文学史に認められる特徴としては，作家の経歴，および主要作品が体系的に列挙されていることが指摘できる．雑誌の記事やインタビューとは違い，こうした情報が過不足なく整理されている．

Hammarbäck-Lundin & Wahlberg 1986 ではセーデルマルム出身者，ヨーロッパの放浪者，そして農村を知る作家という三つの視点からクラーソンを紹介している．そして Hägg 1996 はクラーソンを主にセーデルマルム出身の作家として捉える一方で，彼の文体の特徴を大きく取り上げる．また，Lönnroth & Göransson 1990 は Slas i folkhemmet（国民の家のスラース）と題して，スウェーデンの福祉社会を描き，その意味を問うクラーソンの執筆活動を紹介している．

このように，文献によってクラーソンを紹介する切り口に差があることが分かる．一方，上記いずれの文献でもスウェーデンのヴェステルイェートランドの農村を舞台にした『誰がユングヴェ・フレイを愛すのか』(1986) 『棕櫚の葉と薔薇の花』(*På palmblad och rosor*, 1975) 『君もヘンリエッタを忘れるだろう』(*Henrietta ska du också glömma*, 1977) の三部作が取り上げられ，福祉社会における農村の現実を問題視する作家という一面に触れられている．このことは，クラーソンの執筆活動においてこの三部作が特に評価されていることを示唆している．

2.1.4. 第三者による証言

Fogelström, Per Anders. 1965. “SLAS (alias STIG CLAESSON)”, *Studiekamraten* nr. 47, 11-14. Lund: Bibliotekstjänst.

クラーソンに関する文献を概観すると，彼についての客観的な情報の少なさに気がつく．そのような中で，作家フォーゲルストレムによる 1965 年の記事は，クラーソンに対する数少ない身近な第三者からの証言である．この記事は，クラーソンの経歴に関する文献として支持されているらしく，Theil (1980), Bergman (1980)で参考文献として挙げられている他，教材として Natur och Kultur から出版された『誰がユングヴェ・フレイを愛すのか』 (1989) の中でも参考資料として挙げられている．記事の中で，フォーゲルストレムは主にクラーソンの青年時代について述べており，クラーソン自身の口からは語られない彼の若き日の姿を見ることができる．

3. クラーソン研究の現状

前章では，クラーソンに関する文献の中でも特に見るべきもの，学術論文や書評の参考文献としてよく引用されるものを挙げ，学術論文の紹介と評価を試みた．これらの中で，クラーソンの作品そのものに注目して議論を展開しているものは，Bergman および Ernby の論文である．本章では，これら二つの論文の内容とそこで採られている方法論を概観し，二人の研究がクラーソン作品のどこに問題点を見出しているかを明らかにする．これをもって，今後のクラーソン研究に何が求められているかを知る一助とする．

3.1. 先行研究にみられるクラーソン作品との向き合い方

Bergman (1980) は，自らの方法論について次のように書いている．

> Men det är i nuläget inte heller möjligt att helt överge den traditionella metodiken och då återstår att försöka kombinera denna med Gadamers synsätt.[2]
>
> 「現状ではその伝統的手法を完全に放棄することもまた不可能であるから，結局これとガーダマーの視点を結びつける努力をするしかない．」

（中略）

> Eftersom mitt syfte är att förstå och formulera det samlande projektet har jag koncentrerat mig på att ”lyssna mig fram till”; dels likheter och samband mellan romanerna, dels tankar och händelser, som visar vägen till det samlande projektet.[3]
>
> 「私の目的はその包括的な枠組み[4]を理解し公式化することであるから，私は『聴きわけて先に進む』ことに集中してきた；その対象は小説間に認められるの類似点やつながりであったり，その包括的な枠組みに至る道を指し示してくれる思考や出来事である．」

この論文は，クラーソンの複数の作品に投影されている要素を明らかにしようというもので，その考察は各作品の表面上の技法にはじまり，それから人物の描写法，そして最後に作家自身と作品との関わりへと至っている．最終的には，作家自身のバックグラウンドと作品間に見られる共通の描写との間に関連性が見出され，それがクラーソンが作品に何を投影しているかを導き出すヒントとされている．

これと全く違うアプローチでクラーソンの作品を分析しているのが Ernby (2001) である．この論文は，クラーソンの作品で使われている言い回しや登場人物同士の言葉遣いの違いに注目し，これをもって作品の中に描かれる現在と過去の存在を裏づけようとする．

例えば，作品の中で繰り返し用いられる言い回し “att ha gjort sitt” 「役目を終える・引退する」を取り上げ，辞書上の意味と照らし合わせた上で，この言い回

しが『クラーソンのこの小説が消えてゆく一つの時代を扱ったものであることを表している』[5]ことを突き止める.

Ernby はクラーソンの言葉の中に何か特別な意味を見出したり作者の意図を解釈するのではなく,それらが 1960 年代の終わりにスウェーデンの農村に残っていた昔ながらの人々の生活と新しい価値観との混在を描き出すための素材としてどのような役目を負い，それらが読者に対してどのような効果を持っているのかという点を議論の中心に置いていることがわかる.

3. 2. 問題点と着眼点

Bergman (1980) が作品，手紙，インタビューでの発言などにあるクラーソンの言葉を解釈しようという試みの中で，依拠できる資料の数は極めて限定されたものであった．例えば，伝記的事実を調べる上で，彼は次のように書いている.

> Det finns inte mycket skrivet om Stig Claesson som biografisk person. Den enda tillförlitliga källan, som jag har hittat, om Slas som ung, är en artikel av Per Anders Fogelström i Studiekamraten nr 1 1965.[6]
>
> クラーソンは伝記的人物像としてはあまり多く書かれていない．私の見つけたもので，若いスラースに関して唯一信頼し得る情報源としては，1965 年の『学友』1 号[7]のパール・アンデシュ・フォーゲルストレムによる記事が挙げられる.

クラーソンのデビュー前の経歴に関しては，今日では Schueler (1989) によるインタビューによって，より多くの情報が提供されている．また,『黒いアスファルトと緑の草』(*Svart asfalt grönt gräs* 2000) や『幸福なヨーロッパ』(*Det lyckliga Europa* 2001) といった自伝的作品の発表によって，客観的とは言いがたいものの彼の青年時代を想像するには十分な助けとなる資料も充実しつつある．また，Bergman (1980) の研究において不足していたのはこうした伝記的情報だけではなく，先行研究も事実上なされていなかった．したがって，Bergman の論文はクラーソンの作品を用いて文学研究を試みた最初の例であるといえる.

Bergman は，クラーソンという作家の研究の難しさについて，*Dagens Nyheter* に掲載された Magnus Hedlund による書評を引用している.

> Det fina, det verkligt fina med Stig Claessons böcker är att de knappast låter sig recenseras. Det är sensibilitet och sensualitet som vibrerar i sådana frekvenser att de svårligen kan uppfångas med intellektuella gripverktyg.[8]
>
> スティーグ・クラーソンの著作で何が本当にすばらしいかというと，それらはほとんど書評を許さないことである．それらは知的な手段で捉えることの難しい周波数で振動する繊細さであり，官能なのだ.

そして，この書評に対して Bergman は次のように述べている．

> Risken är stor att man hamnar i en objekt-objekttrelation.
> Samtidigt kan detta paradoxalt nog innebära en öppning. Denna objekt-objekt-relation är ett uttryck för djup alienation men när konstverket, romanen i detta fall, öppnar sig och börjar tala kommer det märkliga att inträffa att romanen upplever mig som upplevande, som subjekt. Vi får en subjekt-subjektrelation.[9]
> 危険なのは，客体=客体関係に陥ることである．
> それと同時にこのことは逆説的に見れば突破口も意味し得る．この客体＝客体関係は深い疎外を表す表現だが，芸術作品が，この場合は小説であるが，読者を自ら受け入れ語り始めた時，その小説が私を体験者として，つまり主体として体験するという奇妙な現象が起こるだろう．我々は主体=主体関係となる．

クラーソンの作品にあるのは，作者の意図に確信がもてない掴み所のなさであり，読者はただその作品を受け入れることしかできない．しかしながら，Bergman は敢えてその点に注目し，クラーソン作品を擬似的な体験者として解釈することへの挑戦を試みたのである．その試みのために，彼は作品間の類似点に注目し，最終的にはそれらをクラーソンの伝記的な事実－主にスウェーデンの農村との関わり－と結びつけるに至った．

一方 Ernby の論文では，このような方法論，そして解釈を巡る苦悶は見られない．彼女は小説上の出来事からは距離を置き，文章の中で起こっている言語的な現象を冷静に分析する．

> Ny och gammal tid markeras även i de substantiv som används när man talar om eller till respektive personer. Nisse Pettersson från Stockholm använder t.ex. tjej om sin sambo Anita medan han tilltalar Elna som damen när de träffas.[10]
> 新しい時代と古い時代という区別は，それぞれの人物について，または人物に対しての台詞で使われる名詞にも現れている．ストックホルム出身のニッセ・ペッテションは，例えば自分のサムボーのアニータについて tjej という言葉を使っているのに対し，エールナに会った際は damen と呼びかけている．[11]

Ernby の研究では，全体を通して上述の引用と同じ手法で分析が進められ，それらの言い回しの意味が明らかにされてゆく．さらには Hägg (1995)[12] が度々賞賛するクラーソン特有の文体についても触れるなど，作品における技巧的な面に重点を置いた考察がなされている．

4. まとめ

クラーソンについての学術的な論文が極端に少ない中で，2 人の研究者によって全く違う方法で研究がなされたことは，クラーソンという作家の研究方法の可能性を探る上で大きな意味をなしているといえる．Bergman (1980) は，読者として物語の体験者に近づくために作品間の関連性を突き止め，クラーソンの伝記的事実をもとにそれらを解釈しようと試みたのに対し，Ernby (2001) は言語そのものに着目し，作品で描かれていることを客観的に，そして科学的に分析した．彼らの業績は，クラーソン作品が研究対象たりえる可能性を十分に示唆するものであると思われる．

Ernby はクラーソン作品の中にひそむ過去と現在のモチーフを突き止め，Bergman は最終的に作品の内容とクラーソンの過去を結びつけることで作品の解釈を試みた．このことから，過去を考察の対象としているという点でこれら二つの研究は共通していることが分かる．Ernby による言語学的な考察は一つの完成を見ている一方で，Bergman はオランダを舞台とした 1980 年の作品『洪水の間に』(*Medan tidvattnet vänder*) も扱っていながら，最終的には解釈の根拠をクラーソンのスウェーデンの農村での体験に依拠している点からは，当時の資料の少なさのために研究をそれ以上掘り下げることができなかったことがうかがえる．クラーソンにとってヴェステルイェートランドの農村での体験がいかに大きいものであるかは想像に難くない．しかしながら，冒頭に述べたとおりクラーソンは共産主義者主導の様々な活動に参加した経歴があるばかりか，世界平和のあり方に対しても独自の考えを持っている．彼の思想に関しても当時に比べ豊富な資料がある今では，クラーソンの作品を解釈するにあたって，作品の中に共産主義との出会いからヨーロッパ旅行，そして戦後の世の中の動きと向き合うことで生まれた彼なりの思想が介在する可能性も考慮に入れるべきであろう．

今後のクラーソン研究では，彼がどのような思想のもとで作品を執筆しているかを明らかにし，それを根底に再度作品を解釈することが求められるのではないだろうか．

(2006-11-15)

注

(*) 本稿は筆者が執筆中の博士論文に付した先行研究検討の１章を要約し，研究ノートとして紹介しようとするものである．

1. Ernby は作品の舞台 Bråten のモデルとなった土地 Gällstad 出身の Kristina Gellerstam という女性と対話し（論文執筆のためのインタビューか，単なる日常の会話の一部であったかは不明），Bråten と Gällstad に類似点があると Gellerstam が証言したことについても触れている．論文の本筋からずれた付加的な言及に過ぎないものの，クラーソンの描く世界の現実の体験者がここに登場していることは興味深い．
2. Bergman (1980: 10) はガーダマーについて以下の引用をしている：Den erfarenhet (Erfahrung) som uppstår överskrider både konstnärens och betraktarens subjektiva tolkningshorisonter (Gadamer, 1972).「そこにある体験 (Erfahrung) は，芸術家と傍観者両方の客観的な解釈の地平を乗り越える（ガーダマー，1972).」．なお，Gadamar (1972)は Ödman, Per-Johan 1979. *Tolkning, förståelse, vetande*. Stockholm: AWE/Geber.からの引用．
3. Bergman (1980: 10 – 11).
4. Nationalencyklopedins ordbok によると，projekt は「ある目的を達成するための考えと方法論を投影したもの」となっている．文脈上，projekt はクラーソンが複数の作品にまたがってある目的のために行っている何らかの試みを指していると思われることから，この辞書の解説を参考にしてこのように訳出した．
5. Ernby (2001: 92).
6. Bergman (1980: 12).
7. Theil (1981) でもこの雑誌が参考文献として挙げられている(s. 101)が，そこでは”Studiekamraten ; 47, 1965, h. 1, s. 11-14” と記述されており，この雑誌が通算 47 号目であることがわかるが，Bergman (1980) ではこれが見落とされている可能性がある．”h. 1” とは häft 1「第１巻」の略であり，1965 年における第１号目ということになる．
8. Bergman (1980)による *Dagens Nyheter* 29. 10. 1976 からの引用．
9. Bergman (1980: 9).
10. Ernby (2001: 93).
11. tjej は「女の子」を意味する俗語．また，damen は「マダム，奥様」といった意味の名詞 dam の単数既知形．この引用は，ニッセが 30 代の青年であるのに対しエールナが年老いた女性であるという点が前提となっている．
12. Hägg (1995: 27) で，彼はクラーソンの文体の簡潔さによって作品の中で日常会話的な臨場感が生み出されていると主張している．

Forskning och metodik avseende Stig Claessons romaner
– En översikt –

Muneo Takemoto

Sammanfattning

I den här uppsatsen presenteras den forskning som finns avseende Stig Claessons romaner. Stig Claesson (1928 -), kallad Slas, är författare från Stockholms Söder. Med romanen *Vem älskar Yngve Frej* (1968) som handlar om glesbygdsproblem och gapet mellan staden och glesbygden fick Claesson sin största framgång. Sedan dess har han intervjuats flera gånger, och man har skrivit ett stort antal recensioner om hans romaner. Han är en av de författare som under flera decennier har haft en ledande roll bland nutida svenska författare.

Däremot har det forskats tämligen lite om Stig Claesson. Det är alltså inte lätt att hitta eller skaffa akademiska dokument som handlar om honom. Men det finns ändå några uppsatser som handlar om Claessons romaner eller författarskap.

Två uppsatser tas upp här. Den ena är *Det samlande projektet i fem romaner av Stig Claesson* (1980) av Mats Bergman. Som man ser i titeln försöker han finna "Det samlande projektet" genom att jämföra olika Slas-romaner och samla likheter bland dessa. Bergman använde författarens biografiska information som hjälpmedel, och förstärkte därmed möjligheten att likheter mellan romanerna och författarens egna erfarenheter har samband, men huvudvikten ligger i mer filosofiska problem som han försökte "lyssna sig fram till" under hela läsningen och få romanen att "uppleva honom som upplevande".

Birgitta Ernby däremot använder en helt annorlunda metod i sin avhandling "Dået och Nuet: en studie i Stig Claessons roman Vem älskar Yngve Frej" (2001). Hon är språkforskare och det är språket i romanen som hon tar upp i sin avhandling. Hon påpekar att när en ung man i romanen vill beteckna "kvinna" har uttrycket två varianter; alltså "tjej" för yngre kvinna och "dam" för äldre kvinna. Hon konstaterar att med liknande användningar av ord visar romanen på en kontrast mellan det nya och det gamla.

Det är fel att säga att forskningar om Stig Claessons romaner är intensiv. Han har inte utforskats tillräckligt, men de två forskare som är angivna här visar oss att Stig Claessons romaner kan ge oss olika intressanta teman för litteraturforskning, speciellt nu när det finns flera essäer och intervjuer som ger oss tillgång till hans idéer, ideologi och också till biografiska information.

作 品

Claesson, Stig. 1968. "Ja, du vet den där jäveln", 21 *berättelser*, 61 – 63. Stockholm: Albert Bonniers Förlag.

——. 1968. *Vem älskar Yngve Frej*. Stockholm: Albert Bonniers Förlag.

——. 1980. *Medan tidvattnet vänder*. Stockholm: Albert Bonniers Förlag.

参 考 文 献

Bergman, Mats. 1980. *Det samlande projektet i fem romaner av Stig Claesson. En studie i den "avsomnade" förståelsen.* (CD uppsats / Lunds universitet). Lund: Litteraturvetenskapliga institutionen.

Claesson, Stig och Gustafsson, Göte. 1996. *Vem älskar Yngve Frej?*. Stockholm: Natur och Kultur i samarbete med Svensklärarföreningen.

Ekman, Arne m fl. 2000. *Nationalencyklopedin Multimedia 2000 på CD-ROM för PC och Macintosh*. Höganäs: Bokförlaget Bra Böcker.

Enander, Crister. 1993. "Skygge Slas i unik intervju: jag vill lära mig leva utan hopp!", *Tidningen Boken*, 14 – 18. Malmö: Tidningsproduktion.

——. 1995a. "Vad fan vill du mig?", text: Crister Enander; foto: Leif Claesson, *Folket i bild/kulturfront*, 24 - 30. Stockholm: Folket i bild / kulturfront.

——. 1995b. "Stig Claesson". Enander, Crister, *Relief*, 221 – 241. Stockholm: Legus.

Ernby, Birgitta. "Dået och nuet : en studie i Stig Claessons roman Vem älskar Yngve Frej", i: Allén, Sture (red.). *Gäller stam, suffix och ord: festskrift till Martin Gellerstam den 15 oktober 2001*. Göteborg: Göteborgs universitet.

Fogelström, Per Anders. 1965. "SLAS (alias STIG CLAESSON) ", *Studiekamraten* nr. 47, 11-14. Lund: Bibliotekstjänst.

Hammarbäck-Lundin, Tia & Wahlberg, Kerstin. 1986. *Författare i vår tid*. Stockholm: Natur och Kultur.

Hägg, Göran. 1995. *Tjugoen moderna klassiker*. Stockholm: Walström & Widstrand.

Härlén, Annika. 1991. *Vem älskar Yngve Frej; en jämförelse mellan Stig Claessons roman & Lars Lennart Forsbergs film*. (CD uppsats / Lunds universitet). Lund: Litteraturvetenskapliga institutionen.

Lidbeck, Gunilla. 1998. "Stig Claesson, 'Slas': 'Man är ju uppväxt med skomakarflit.'", *Femina* Nr. 2, 91-94. Helsingborg: Aller Specialtidningar.

Lönnroth, Lars & Göransson, Sverker. 1990. *Den svenska litteraturen*. Band V. Stockholm: Bonnier Fakta Bokförlag.

Malm, Eva. 1975. *Förteckning över ett urval gestalter i Stig Claessons romaner*. Specialarbete vid Bibliotekshögskolan. Borås: Bibliotekshögskolan.

Schueler, Kaj. 1989. "Två gentlemän har ordet", *Svenska Dagbladet*. Stockholm: Svenska Dagbladet.

Theil, Claes 1981. *Stig Claesson: som författare*. Specialarbete / Bibliotekshögskolan. Borås: Bibliotekshögskolan.